

1. ミナミクロダイ

結果と考察

海面小割網生簀設置場所である底地湾は開放型の内湾で北西方向からの風波を受けやすく、一方川平湾は閉鎖型の湾であるが小割網生簀は北の風の影響を受ける。

海面小割網生簀を使用して稚魚を飼育するのは昭和55年度が最初である。支場から遠距離であったため、飼育管理面で不安定要素が多分にあった。陸上水槽生産池から生簀までは往復時間で約50分要し、小型トラックであるため少数、多回を繰返し、2日間で約21万尾を輸送した。稚魚の状態は生産池から取り揚げ直後容器内で旋回し横臥する個体が多数みられたが、その後快復した。生簀収容当日及び翌日は収容魚に変化はみられなかったが、2日後から季節風の強風により、生簀網に吹きつけられ大量の斃死魚が相次ぎ、収容後10日間で18.7～41.0%の斃死が生じた。その後は目立った斃死はみられず、平均歩留りは34.6%であった。

昭和57年度は5区の小割網生簀へ約66万尾の稚魚を収容して飼育した結果、平均歩留りは12.1%と低率であった。この年の大量斃死の要因は季節風による強い風波と陸上水槽飼育中における寄生性原虫の発生により寄生魚が大量斃死したものとみられる。

昭和58年度は沖出し尾数が1.8万尾と少なく天候に恵まれたこと(季節風の吹き出しが例年より弱い)短期飼育であったことが歩留りの(72.2%)良かったものと思われる。

昭和59年度は例年と同様の傾向で沖出し後、10日目までに歩減りがみられた。しかしアルテミア幼生を給餌した試験区は他の試験区よりも飼育初期の段階においては斃死数は激減した。この年度においては細菌性の疾病が飼育開始1ヶ月前後に発生して大量斃死が生じ、その結果、平均歩留りは23.7%であった。

5ヶ年間に於ける大量減耗の共通点は沖出し直後から10日目に生じている。例年本県では旧暦2月は季節の変わりめに当たり、天候不順により小型台風並の強風が吹き荒れることで沖出し時期がその時期と重なるためとみられる。対策としては季節風が吹き荒れる前に沖出しするか、稚魚サイズの大型化、あるいは健苗種苗の生産が考えられる。その他魚病による斃死では細菌性疾病がある。対策としては、発生時期を把握して、餌料に栄養剤や抗生物質を添加して予防に重点をおく必要がある。

成長については4月中旬で30mm、5月中旬で50mmサイズの稚魚が生産可能となっており

ミナミクロダイについては早期種苗としての価値は充分あるものと思われる。